

中学生・高校生の職業意識に関する研究 概要版
 —「職業レディネス・テスト」検査データの分析(基礎分析編)—

1 研究の目的

昨今の雇用情勢に改善が見られるものの、若者の雇用問題は不本意な非正規労働や早期離職など多くの課題を抱えている。こうした背景のもと社会的・職業的自立に向けた力の育成が必要とされ、中学生・高校生の体系的・系統的なキャリア教育の充実が求められている。公益財団法人愛知県労働協会は「あいち労働総合支援フロア」において求職者等に対する職業相談などの業務を行っている。また、これからの社会を支える若者が、意欲と希望を持って働くことができるよう、中学校・高校へ職業適性検査を普及するなどキャリア教育の支援にも積極的に取り組んでいる。そこで今回、若者のキャリア教育の推進に資することを目的に、中学生・高校生の職業意識の発達度などについて研究することとした。研究の基礎となるデータは中学生・高校生の職業意識に関する適性検査10年間分のデータを使い、職業興味などの特徴や意識変化を時系列的に検証する。

2 分析方法

公益財団法人愛知県労働協会が、あいち労働総合支援フロア職業適性相談コーナーで実施した労働政策研究・研修機構(JILPT)の「職業レディネス・テスト」の採点・判定データ(2007年からの約10万件)を用いて男女、学年、学科など属性別に集計結果を分析する。

データの詳細・属性は下記のとおりである。

中学生		高校生								
調査年	計	調査年	普通科(総合)	商業	工業	農林水産	定時制	特別支援学校	その他	計
2007	3,667	2007	972	1,480	693	488	269	15	4	3,921
2008	5,759	2008	2,293	1,262	1,538	471	353	13	72	6,002
2009	4,671	2009	1,053	1,257	1,924	704	250	32	113	5,333
2010	3,865	2010	1,513	1,634	1,044	701	296	17	40	5,245
2011	7,063	2011	1,745	1,128	1,044	697	221	5	4	4,844
2012	7,790	2012	1,625	1,153	1,014	695	298	7	43	4,835
2013	8,243	2013	2,311	1,151	1,074	358	494	41	18	5,447
2014	9,083	2014	2,118	1,454	1,284	517	404	35	0	5,812
2015	5,088	2015	3,345	1,414	1,093	384	323	27	0	6,586
2016	2,139	2016	791	407	0	318	59	0	0	1,575
計	57,368	計	17,766	12,340	10,708	5,333	2,967	192	294	49,600

3 報告書の構成

第1章は、研究の背景と目的。第2章は、使用するデータの基となる適性検査「職業レディネス・テスト」の概要。第3章は、先行研究のまとめ。第4章は、最近の経済指標・雇用統計。第5章は、使用するデータの基本属性。第6章は、中学生・高校生の職業レディネス(時系列分析など)。第7章は、総括—分析結果をどうみるか(インプリケーション)—。以上の構成からなる。

4 研究・分析の内容

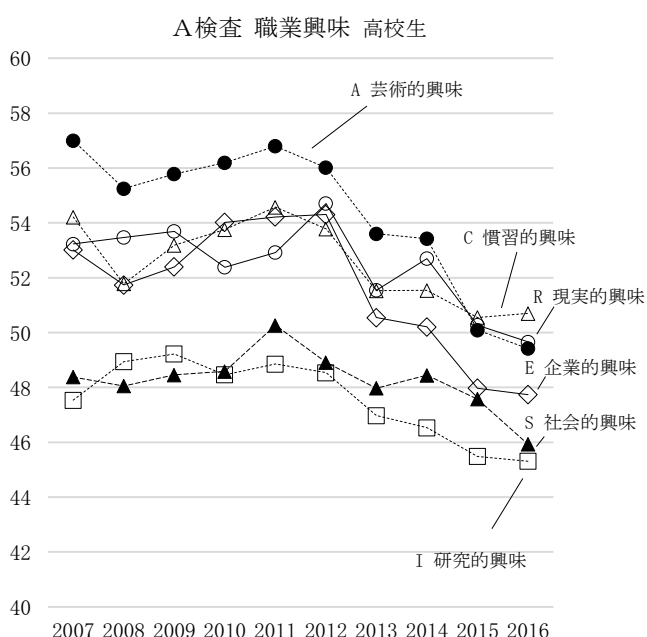
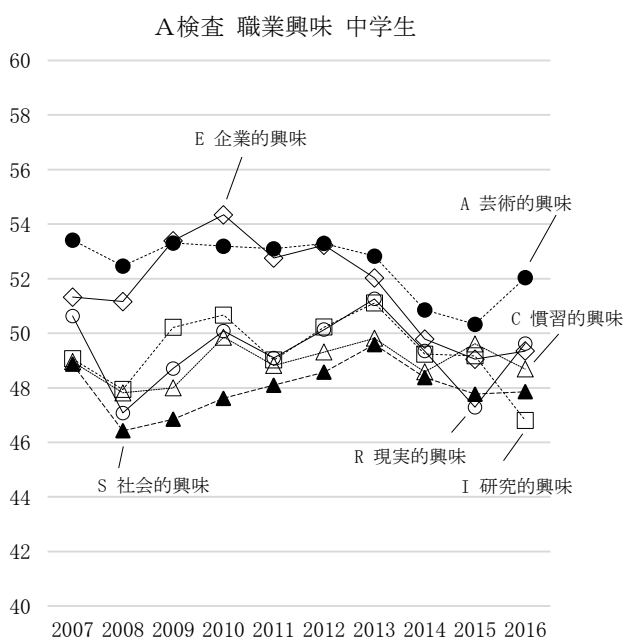
分析には、労働政策研究・研修機構『職業レディネス・テスト』の中学生・高校生の判定結果を使用するが、この検査は、A検査(職業興味)、B検査(基礎的志向性)、C検査(職務遂行の自信度)からなり、各検査では次の領域・志向性を測定することができる。

A、C検査	領域	内容
A検査 「職業興味を測定」	R (現実的興味)	機械や物を対象とする具体的で実際のな仕事や活動を好む
	I (研究的興味)	研究や調査など研究的、探索的な仕事や活動を好む
	A (芸術的興味)	音楽、美術、文芸など芸術的領域での仕事や活動を好む
C検査 「職務遂行の自信度を測定」	S (社会的興味)	人に接したり、奉仕したりする仕事や活動を好む
	E (企業的興味)	企画や組織運営、経営などのような仕事や活動を好む
	C (慣習的興味)	定まった方式や規則に従って行動する仕事や活動を好む

B検査	志向性	内容
B検査 「日常生活場面での興味の方向を測定」	D (対情報関係)	知識、情報、概念、データなどを取り扱うのを好む
	P (対人関係)	人と直接関わっていくような活動を好む
	T (対物関係)	機械や道具など、物を取り扱うことや戸外での活動を好む

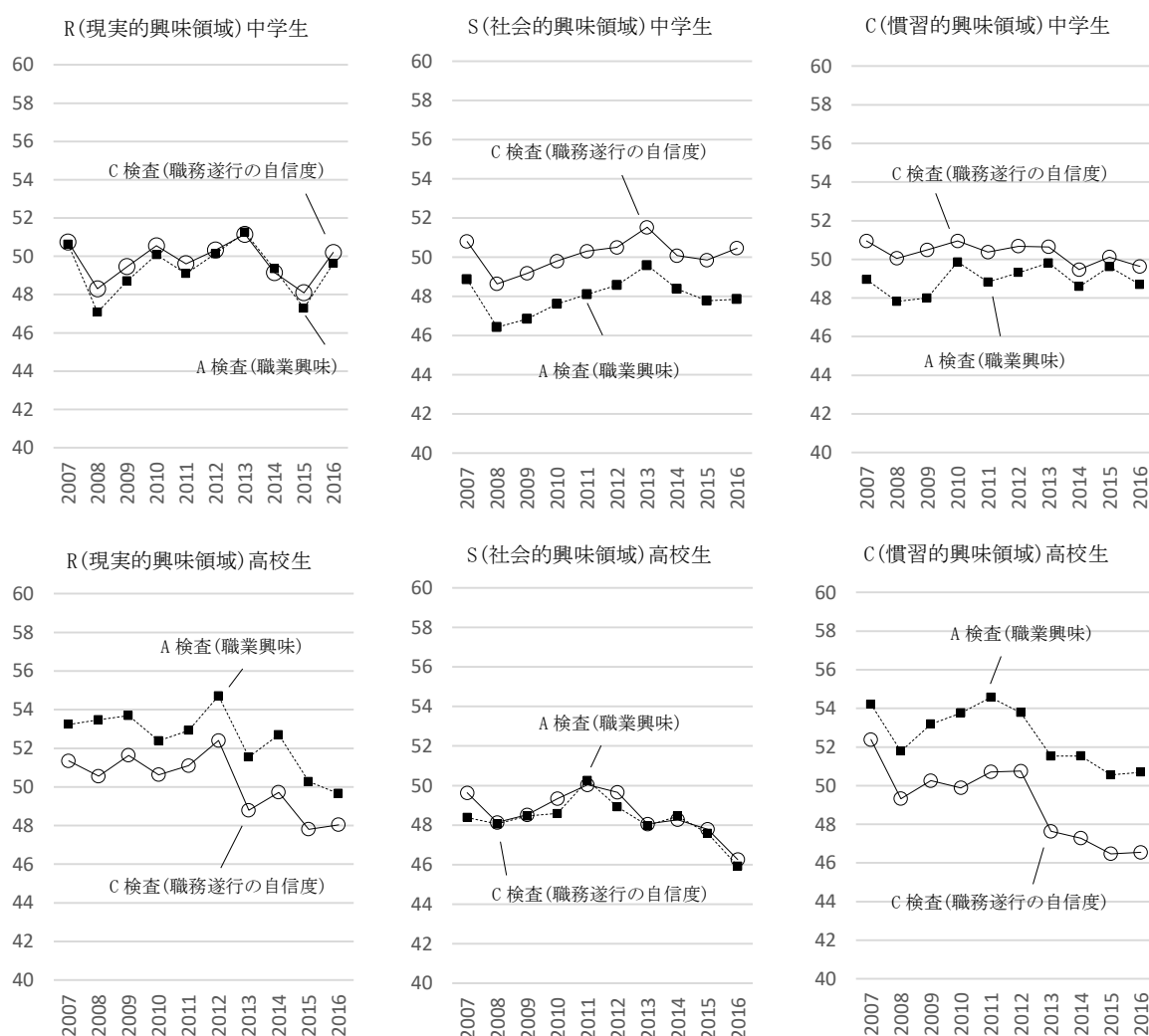
(1) 職業興味の実分析

職業興味では、中学生の芸術的興味領域と企業的興味領域が他の領域に比べて高いが、その差は減少傾向にあることがわかる。また、高校生では職業興味の各領域が全体的に低下傾向にあることが分かる。



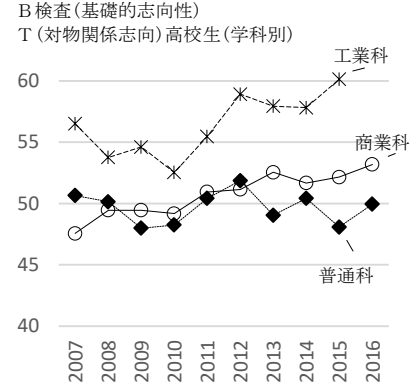
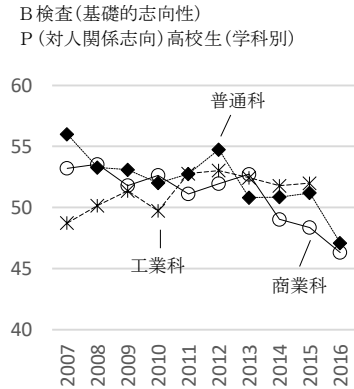
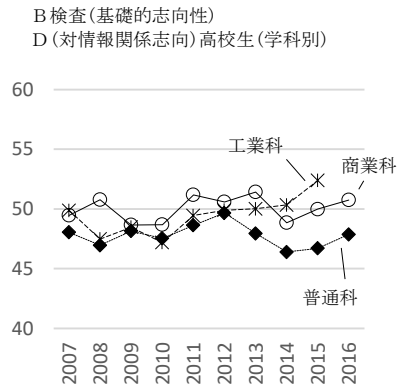
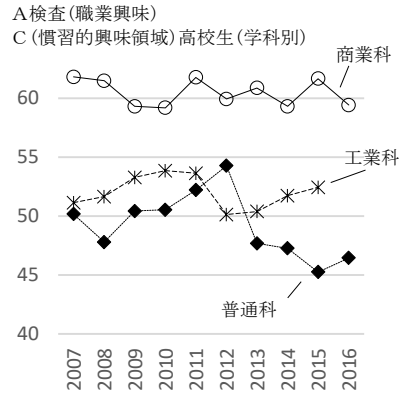
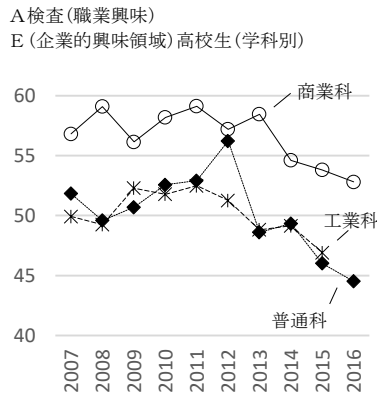
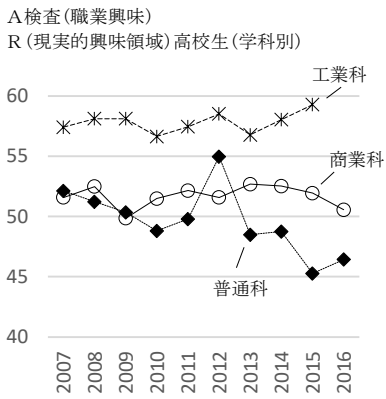
(2) 職業興味と職務遂行自信度の差の検証

中学生のA検査(職業興味)とC検査(職務遂行の自信度)で乖離が最も大きいのは領域S(社会的興味領域)で、次いで領域C(慣習的興味領域)になっている。A検査は仕事をやりたい(興味がある)程度でC検査は自信の程度である。したがってC検査の数値がA検査を上回っているということは、仕事をやりたいとはあまり思わないが自信はあるということを示している。高校生では領域R(現実的興味領域)と領域C(慣習的興味領域)で乖離が大きい。また、高校生の各領域で基本的にA検査(職業興味)の方がC検査(職務遂行の自信度)を上回っており、中学生が基本的にC検査(職務遂行の自信度)の方がA検査(職業興味)を上回っていたことと逆になっていることは、興味深いものとなった。それは年齢が上昇すると共に、より現実感を持って仕事を考えるようになった結果と推察される。



(3) 職業興味等に関する高等学校学科別の比較

A検査(職業興味)の結果から、領域R(現実的興味領域)では工業科が高く推移し、領域E(企業的興味領域)、領域C(慣習的興味領域)では商業科が高くなっており、各領域で学科の特徴が出ていることがわかる。B検査(基礎的志向性)の結果では、特に志向T(対物関係志向)で工業科が高くなっていることがわかる。また、志向P(対人関係志向)がいずれの学科でも低下傾向にあることも注目される。



5 総括 —分析結果をどうみるか(インプリケーション)—

中学生では、仕事に対する自信の程度を示すC検査(職務遂行の自信度)の得点が、その仕事への興味程度を示すA検査(職業興味)を上回っていることが特徴的であり、高校生でA検査(職業興味)がC検査(職務遂行の自信度)を上回っていたことと対称的である。これは中学生時点では仕事に関する認識が十分でないことに起因していると考えられる。

また、各検査結果の時系列の変化として中学生の得点は大きな変化はなかったが、高校生は2011年以降、低下傾向が目立つようになってきている。2011年は東日本大震災があった年であり、そのことが社会に出るのがより近い高校生のほうで大きな影響を及ぼしたと考えられる。

高校の結果として注目されるのは、特に普通科で職業に対する興味と自信が低下していることである。近年、高校の普通科においても職業を意識付ける取組みが行われているが、それでも意識は低下している。大学進学が最も重要な目的であったとしても大学進学は職業を意識してこそ意味のあることと考えると、こうした傾向への対応策が必要になってくると考えられる。

平成29年2月28日発行

中学生・高校生の職業意識に関する研究 概要版
—「職業レディネス・テスト」検査データの分析(基礎分析編)—

編集・発行 公益財団法人愛知県労働協会事業課労働情報グループ
(あいち労働総合支援フロア産業労働情報コーナー)

所在地 〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-4-3 8
愛知県産業労働センター17階

電話 (052) 485-7153